線香の火

中谷宇吉郎

青空文庫

昔、寺田（寅彦）先生が、よく「線香の火を消さないように」という言葉を使われた。

大学を新しく卒業して、地方の中学校即ち今の高等学校などへ赴任する学生が、先生のところへ暇乞いに行くと、先生はどういうところへ行っても、研究だけは続けなさいと諭された。「地方の学校へ行くと、研究の設備などは、もちろん少いだろう。研究費だってほとんどないだろうが、その気さえあれば、研究は出来るものですよ。設備や金がなくても出来る研究というものも、ありますよ。一番いけないのは、研究を中絶することなんだ。何でもいいからとにかく手を着けて、研究を続けることが大切です。一度線香の火を消したら駄目ですよ」

特別に優れた人たちのことは別として、普通の意味での秀才でかつ真面目な学生だった人が、いつの間にか、学問の世界から離れて行ってしまう場合がよくある。ところが大学時代は平凡な学生で、卒業後も十年くらいはほとんど噂に上らなかった人が、案外にいい研究者として、次第に学界の表面に出て来るような場合もある。

そういう場合に、その原因とか、理由とかいうものを考えても、結論は出るはずがない。一々の場合について、条件は皆ちがうからである。運ももちろんあろうし、本人の本当の能力が、時とともに現われて来る場合もあろう。しかし千差万別の条件の差を超越して、普遍的に言えることが少くも一つはあるように思われる。それは、研究者として成熟した人は、線香の火を消さなかった人である。

科学、たとえば物理学のような学問をやっても、皆が研究者になる必要はない。しかし科学をやった以上は、やはり研究者となるのが本筋であって、他の方面はいわば傍系である。もちろん教育は非常に大切であり、また科学行政のような仕事も、国家的見地から見れば、区々たる研究などよりも、もっと重要である。しかしそれにもかかわらず、本筋は何かと聞かれれば、やはり科学者の任務は研究にある。ということは、現在ばかりでなく、将来を含めても、言い得ることのように思われる。

そういう意味で、寺田先生の「線香の火を消してはいけない」という言葉には、重要な意味があるような気がする。この頃になって、三十年も昔に言われた先生の言葉を、しみじみと思い出しているのには、わけがある。

先年、二年あまりアメリカの研究所で仕事をして見て、日本と較べてあまりにも研究能率の差があるのに、一驚を喫した。日本だったら、二十年かかる仕事が、アメリカでは二年で出来るのである。現在の日本の研究費および施設は、世界での「地方の高等学校」である。それなればこそ、われわれは線香の火を消してはならないのである。

（昭和三十年十月二十二日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店
　1988（昭和63）年9月16日第1刷発行
　2011（平成23）年1月6日第26刷発行
底本の親本：「百日物語」文藝春秋新社
　1956（昭和31）年
初出：「西日本新聞」
　1955（昭和30）年10月22日
入力：門田裕志
校正：川山隆
2013年1月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

線香の火

中谷宇吉郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/